

# 山西省夏県廟前鎮楊村「忽失歹碑」について

村岡 倫

## 1. 「忽失歹碑」概要と録文

1996年、山西人民出版社より、山西省考古研究所編『山西碑碣』が発刊された。漢代から元代までの山西省に現存する碑の拓影と録文が載せられおり、元代のものは21点を数える。標題の「忽失歹碑」もその中の一つである。『山西碑碣』の説明によれば、「忽失歹碑」は、後至元6年(1340)の立石にかかり、標題の正式な名称は、「大元増朝列大夫龍興路富州達魯花赤□都尉追封隴西伯忽失歹公神道碑」だが、「大元増朝列大夫…」の「増」は明らかに「贈」の誤りであり、「龍興路富州達魯花赤□都尉」も、前後を考えても拓影を見ても、□には「騎」が入るであろうことは間違いない。

この碑については、『三晋石刻総目・運城市巻』(山西古籍出版社、1998年)にも簡単な紹介が載せられ[187頁]、さらに、『中国文物地図集・山西省分冊(下)』(中国地図出版社、2006年)にも解説があり[1139頁]、それらは正しく「贈」・「騎」とする。しかし、『三晋石刻総目』は、忽失歹の官職である「富州達魯花赤騎都尉」の「富州」を「今雲南富州県」と誤った説明を付し、『中国文物地図集』もそれを踏襲している。確かに雲南行省広南西路管下にも富州はあるが、碑には、龍興路の富州であることが明確に記されている。龍興路は元代の江西行省に属し、富州は、現在の江西省豊城市に当たるので、雲南の富州県ではない。

ともあれ、上記の三つの書籍の解説を総合すると、この碑は、山西省南部、運城市の北東郊、夏県廟前鎮楊村にある忽失歹墓の前に、石人、石羊、石虎等を伴って現存し、篆額部分は、長さ35cm、幅85cm、幅22cm、碑自体は、長さ187cm、幅85cm、厚さ22cmであるという。

録文を載せるのは『山西碑碣』だけであるが、行分けをしていないこともさることながら、誤記・誤読が目立つ。そこで、2004年度から2006年度にかけて採択された、科学研究費補助金・基盤研究B「13, 14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究一元朝史料学の構築のために一」(研究代表者:奈良大学教授・森田憲司)の研究集会において、この碑を取り上げ、『山西碑碣』の拓影を確認しながら録文を検討した。

その結果、『山西碑碣』が示す録文をかなり補訂できたが、残念ながら、『山西碑碣』に載る拓影と録文だけが頼りであり、したがって、問題ありとしながらも、暫定的に『山西碑碣』のままにしておいた文字もいくつかあった。次頁に、集会での検討結果を踏まえ、補訂を加えた録文を載せておく。

なお、拓影から、この碑は三つに割れているのがわかるので、録文には、それを示すためにラインを引いた。録文の後に、「忽失歹碑」から今の時点で知り得る情報を簡単に記しておくが、詳しくは、訓読・訳注も含め、稿を改めることにしたい。

忽失歹公神道碑并銘

- 1 大元贈朝列大夫龍興路富州達魯花赤駙都尉追封隴西郡伯忽失歹公神道碑并銘
- 2 中順大夫同知河東陝西等處都轉運使司事王 克敬 撰
- 3 大中大夫河東陝西等處都轉運使知渠堰事路 希賢 書 丹
- 4 中奉大夫河東陝西等處都轉運使知渠堰事卜 顏鐵 陸 而篆額
- 5 公名忽失歹蒙古名忽失人氏其先宋忽朗世居龍池河隸
- 6 隴山下人上位下職統軍百夫長時
- 7 太祖皇帝龍飛朔漠將大震於金蓮分調大兵躬擐馬凡出入警蹕亦莫不在嘗□□利糧餉弗繼計不知出公於□鉢益于舖以進
- 8 上人悅遂賜姓何氏焉蓋益何同音故也受命大帥察兒統屬聽節制平迺夏臺川家有妻撒兒傑生男二人長忽失歹即公也次不只兒
- 9 以軍庸官至千夫長公生而秀異勇略雄偉善騎射時年甫弱冠襲先職河南□□百夫長越明年值李璫亂山東擾攘遣公統兵
- 10 捕之公以壯勇躬□□石與上卒同勞苦凡臨敵對寇悉踴躍以當前鋒嘗成師曰大丈夫受命討賊捐軀報□正在今日有不如律□
- 11 吾當躬斬之以徇矣於是衆莫敢有怠志每遇戰益勇斬馘百餘級一日關方酣騎跌為寇所擒寇異公奇偉以欲生之以授節帥衆□
- 12 叱聲□□□吾惟有死以謝國安肯附賊以取榮名哉寇以公弗若已遂殺之從者以馬革裹尸還葬焉時公年三十有三人綿綿□
- 13 兇察人氏生男一人名高閭女一人名春哥適名族公既蚤世高閭公始孩生而俊慧有大器不事生產業儒書古語兼習之始山國
- 14 學造選策任廣東高閭司蒙古按考滿凡五遷縣監其承流宣化政蹟炳煥累陞至朝列大夫同知吉安路事致仕忽失公以同知公
- 15 貴贈龍興路富州達魯花赤追封隴西郡伯夫人綿綿追封隴西郡君同知高閭公今暮年有三步雲飛而言□壯悼先世歿於兵□漣
- 16 滅遂無聞敬勒石以銘之其報本追遠之意篤矣嗚呼公以石族襲父職位百夫長方壯歲奮勇擊寇歿於鋒□惜乎天不假年其勳業
- 17 之未盡者惟死獲其所宜與烈日爭光矣子高閭公蚤孤勤苦勵志克終先業榮登台鼎而追封焉殆天之報□也歟噫貽謀足以游其
- 18 後□體足以增其光是宜銘其銘曰
- 19 惟公之系 寔曰蒙古 □□□ 躬率行伍
- 20 太祖龍飛 耀武揚威 □□□ 中上底綏 迺下迺築 夏臺是壘 於義生公 □略豪雄 襲百夫長
- 21 率旅山東 賊壇跋扈 梗□□ 驅犯寇 叱咤生風 云胡不會 竟隕厥躬 □名邁古 烈日飛空
- 22 子曰高閭 大振於宗 刻志□□ 古博入通 五遷監邑 倅□□ 告老優爵 □守朝列 日父曰母
- 23 寔惟前哲 茂典追封 惟隴西伯 式忠式孝 日月昭揭 有子如是 千祀弗滅 既顯于前 其垂于後
- 24 刻石鐫銘 條山拱□
- 25 至元六年歲在庚辰嘉平良日子同知高閭樹石

傍線は『山西碑碣』の録文の文字を訂正したもの

## 2. 「忽失歹碑」内容の略述

### 【5行目】

忽失歹の名は「フウシテイ」であり、フウシン部族の男であることを表す。しかし、彼はスニト（雪尼台）部族出身であると記されており、一見矛盾するようだが、8行目に見える彼の母「撒兒傑」がフウシン部族の女性であれば、「フウシテイ」という名で呼ばれる可能性はあろう。

忽失歹の「先は朶忽朗（ドクラン）」というが、これは、忽失歹の父である。代々居住したという「龍池河」について、研究集会で、松田孝一氏が、漢籍に「龍居河」という字句で散見する「ケルレン河」に比定できるのではないかと指摘した。傾聴すべき見解であり、これが正しいとすれば、スニト部族の遊牧地の一つとして、ケルレン河流域を想定できる貴重な史料となる。

### 【6行目～7行目】

6行目に、朶忽朗が、チンギス・カンの庶子コルゲン大王位下（コルゲン・ウルス）に配属され、「百夫長」つまり「百戸長」となったことが記され、7行目には、太祖皇帝チンギス・カンの金国遠征に従ったことが記されているが、コルゲン・ウルスの創設は、1227年に死去したチンギス・カンの最晩年のころであり〔杉山正明「モンゴル帝国の原像—チンギス・カン王国の出現—」『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、2004年（原載は『東洋史研究』37-1、1978年）、38頁〕、チンギス・カンの金国遠征は、1211年～1215年のことであるので、6行目と7行目は話が前後している。

### 【8行目～12行目】

その後、朶忽朗は、タガチャル（塔察兒）に従い、金国に遠征し、1234年の金国滅亡後、夏県に居を構えたという。タガチャルの軍団とは、第2代オゴデイ・カアンの治世、1230年より山西から侵入し、金国殲滅に功績があり、後の「河南淮北蒙古軍都万戸府」の起源となった軍団の一つである〔松田孝一「河南淮北蒙古軍都万戸府考」『東洋学報』68-3-4、1987年、39頁、堤一昭「元代華北のモンゴル軍団長の家系」『史林』75-3、1992年、54-57頁〕。

彼の軍団は、モンゴルの全千戸集団から、10名につき、1名～2名の割合で徴集された探馬赤軍であった〔松田前掲論文43頁・60-61頁〕。朶忽朗が率いた軍団も、コルゲン・ウルスから選抜され、タガチャル軍に組み入れられたと考えられる。コルゲン・ウルスは四千戸のウルスであった。10名につき1名～2名であれば、400～800戸が、コルゲン・ウルスから徴集され、タガチャル軍に編入されたことになる。6行目、朶忽朗が「百夫長」であったのは、そのような背景を踏まえた上でのことであったかもしれない。

実は、タガチャルはフウシン族である。先に、忽失歹が「フウシテイ」という名

であることから、その母「撒兒傑」が、フウシン族である可能性を指摘したが、この女性がタガチャルと何らかの血縁関係があったことも想定できるのではないか。タガチャル軍は、1234年の金国滅亡後、聞喜県東鎮に根拠地を置いた〔松山前掲論文45-48頁、堤前掲論文56-57頁〕が、朶忽朗が居住した夏県は、聞喜県の南、直線距離でわずか約25kmの地点である。両者の関係が密であったことがわかる。朶忽朗が、フウシン族の撒兒傑を娶ったのは、そのようなタガチャルとの関係が背景にあったと推測できる。

忽失歹がいつ生まれたのかは碑に記されていない。しかし、9行目に、1262年に山東で起こった「李璫の乱」鎮圧に活躍したことが記されており、その後の戦役で殺害されたことが12行目に記されている。享年33歳であったという。忽失歹の死が、1262年の「李璫の乱」から、どれぐらい時を経た後のことなのかわからないが、33歳で死去した彼が生まれたのは、父の朶忽朗がタガチャル軍に編入し、金国遠征が開始された1230年以降であることは確かである。あるいは、金国滅亡後、タガチャルが聞喜県に、朶忽朗が夏県に居住するようになってからのことであったか。

さて、朶忽朗が撒兒傑を娶り、忽失歹が生まれたのが、タガチャル軍団の金国侵入後、あるいは金国滅亡後で、それぞれ聞喜県・夏県に居住することになってからだとすると、タガチャルの探馬赤軍団は、女性を引き連れていた、つまり家族ぐるみで遠征をしたということなる。改めて、探馬赤軍団編成の諸相を考える必要が出てこよう。いずれにしても、探馬赤軍団第二世代である忽失歹は、金国遠征中の漢地で生まれ、そして育ったのである。

朶忽朗の死に関しても、それがいつのことであったのか、あるいは、その状況も含めて碑には記されていない。忽失歹は、父の死後、軍団を引き継いでいる。朶忽朗と撒兒傑の間には、8行目にあるように、長男忽失歹の他に、次男不只兒（ブジル）があった。しかし、前述の通り、朶忽朗は、1211年からのチンギス・カンの金国遠征に従っており、この時点ですでに成人していたことがわかるので、撒兒傑を娶る以前にも、別の妻と子がいたことも考えられる。

#### 【12行目以降】

忽失歹の妻は「綿綿」と言い、「于兒察人氏」であったというが、これがどの部族に比定できるか、今のところ成案はない。二人には高閭という男子、春哥という女子が一人ずつあった。高閭は諸官職を歴任し、後至元6年（1340）に、父のために碑を立てたということである。標題にもある「龍興路富州達魯花赤・隴西郡伯」は忽失歹の死後贈られ、あるいは追封された称号であった。妻の綿綿も、同じく「隴西郡君」が追封されている。朶忽朗、忽失歹（弟不只兒）、高閭の三代は、管見による限り他に史料が見いだせない。今後の重要な課題としておく。

### 3. 「忽失歹碑」探訪

上記森田科研終了後、今度は2008年度より3年間、私を代表とする科学研究費補助金・基盤研究B「中国社会へのモンゴル帝国による重層的支配の研究—元朝史料学の新展開をめざして—」が採択された。その海外調査の一環として、2009年夏、科研の研究分担者である渡邊久氏と、洛陽周辺と山西省南部の石刻の調査を計画した。その際、夏県廟前鎮楊村も調査コースに組み入れ、「忽失歹碑」を実見し、かつて研究集会で判読できなかった文字を確かめようと考えたのであった。その顛末を最後に記しておくことにしたい。

2009年8月22日に北京から洛陽に入り、洛陽でいつもお世話になる通訳兼ガイドの薛禎さんと合流した。チャーターしたクルマに乗り込み、薛さんの案内で、22日は洛陽周辺の史跡を巡り、その日は洛陽に宿泊した。翌23日早朝から山西省へ向けて移動したが、途中、新安の漢函谷関、靈宝の古函谷関を参観した。特に古函谷関の碑廊には元代の碑文も所蔵されており、調査に時間を費やしたため、山西省に入り、夏県廟前鎮楊村に到着したのは、すでに午後3時を回っていた。

楊村に到着後も、忽失歹墓を知る人がなかなか見つからず、ずいぶん手間取ったが、薛さんが、ようやくその場所を知っている古老を探し出してくれた。古老にもクルマに乗ってもらい、その案内で村はずれに向かった。畑の手前でクルマを降り、さらに畑の畦道を奥へと歩いた。遠くに、高さ5、6mほどの木が5本生えているのが見えた。畑の中にそのような箇所が他にないので、ずいぶん目立っていた。木の回りには比較的背丈のある草が生い茂っている。あの場所が墳墓だという。

ただし、驚いたことに、古老はこの墳墓を「クビライの墓」だと言っていた。そして、その碑文を、「クビライの碑」だと言うのである。どうやら、これが村人たちの共通した認識であるようだ。もちろん、全く誤った認識であるが、おそらく、遺されている碑文がモンゴル＝元朝時代のもので、誰かモンゴル人の碑であるということが事実としてわかっており、「忽失歹」という名と、クビライの漢字音写「忽必烈」が混同されたのであろう。当然、「忽必烈」の方がはるかに有名人であるということも、村人に誤った認識を持たれる要因ともなったと思われる。逆に、私は、「忽必烈墓」と誤られるということは、間違いなく「忽失歹墓」であると確信した。

しかし、徐々に墳墓に近づいてはいるものの、187cmあるはずの碑石は見えないし、『中国文物地図集』や『山西碑碣』が言うような、石人、石羊、石虎も見えない。碑文のことを古老に尋ねると、自分の子供の頃は、その碑文は悠然と立っており、威容を誇っていたが、いつの間にか、三つに割れ、横たわるようになっていたという。私は、『山西碑碣』に載る「忽失歹碑」の拓影から、三つに割れている様子がわかることを思い出した。それはすでに述べた通りである。もちろん、調査にはそのコピーも持参していたのだが、割れていることを全く失念し、立っているように思い込んでいた自分に恥じ入った。

古老によれば、三つに割れたのはかなり昔のことであるらしく、その原因も今となってはわからないようである。ともあれ、横たわっているのなら、遠くからは当

然見えないはずだし、石人、石羊、石虎も、草木に隠れていて、ここからは見えないのだろうと納得しながら、さらに畦道を進んでいった。

やがて墳墓に到着した。草木はゆるやかに盛り上がるマウンドに集中して生えていることがわかる。だが、やはり、横たわっているはずの碑も、石人、石羊、石虎も見当たらない。古老に、その所在を知らないか尋ねてみた。すると、石人、石羊、石虎に関しては、次のような話を聞かせてくれた。実は3年ほど前、突然二人の男が大きなトラックでやってきて、それらを持ち去ろうとしたが、二人だけではできず、翌日、今度はもっと大勢の人数でやって来て持ち去ったのだという（ただし、古老は「石虎」については、「石の犬」と認識していた）。

今回の科研の分担者である船田善之氏は、石刻は、刻された内容を永く遺すという使命を帯びた史料であるが、その反面、刻石・立石の時点から、損壊・遺失と常に向かい合う宿命を待つと述べる。そして、自然的な要因よりもむしろ人為的な要因、すなわち建造物の資材に転用されたり、戦乱で破壊されたり、そちらの事例の方が多いただろうと指摘している〔船田善之「山東日照・諸城の元代石刻の現状—石刻現地調査の展望と課題—」九州大学二十一世紀COEプログラム（人文科学）『東アジアと日本—交流と変容』第4号、2007年、17頁〕。

船田氏のほかにも、数多くの史跡・石刻の調査に携わってきた研究者の中には、近年、本稿でも取り上げた『三晋石刻総目』や『中国文物地図集』などがシリーズで発刊され、研究者の現地調査がこれまでと比べて格段に便利になったが、同時に、心ない者たちに、「お宝」のありかを知らせることもなった、と嘆いている方々がいる。特に、この忽失歹墓のように、何の保全もできていない史跡はかっこのターゲットになってしまうのであろう。

「忽失歹碑」も、石人、石羊、石虎と同様に持ち去られたのか。かつて研究集会で取り上げて以来、長い間、実見することを期し、やっとここまでたどり着いたのに、その望みもかなわなかったか、と落胆しつつも、マウンドの周りを歩いてみた。しばらく歩き回ってあきらめかけたところ、ふと草むらの中に大きな石の塊が見えた。草を払ってみると、何と明らかに碑文の台座であった。

さらに、少し離れた所に、これも草むらに隠れるように、1m四方ほどの平板な石が横たわっていた。草を払ってよく見ると、かすかに字が見える。すでに、ここにたどり着くまでにかかなりの時間を要したため、日も沈みかけており、肉眼ではほとんど見えない。

だが、手元にあった『山西碑碣』の「忽失歹碑」拓影のコピーを見ると、何と、三つに割れたうちの真ん中の部分が、足元に横たわる石の形そのままであった。古老の言うように、「忽失歹碑」は三つに割れて横たわっていたのである。私は驚喜し、割れた他の二つの部分が周辺にないか、さらに渡邊氏とずいぶん探し回った。しかし、見つからない。

古老も、前述の男達がやって来た後、碑文がどうなったのか、全くわからないらしい。他の二つがどうなったのか。やはり男達が持ち去ったのか。だが、持ち去さ

ったのであれば、なぜ、台座と真ん中の部分だけが残されたのか。いや、あるいは、もう少し広い範囲で、畑の中まで探せばあったのかもしれない、と今更ながら思う。取りあえず、残された碑文の断片をデジタルカメラで撮っておいた。

ホテルに入り、撮った写真をノートパソコンに取り込んで見てみると、幸いにも、肉眼で見えなかった文字がほぼ見えていて、それらの文字から、やはり間違いなく「忽失歹碑」の真ん中の部分(録文参照)であることが確認された。帰国後、改めて、写真に見える文字と、研究集会で『山西碑碣』の録文を検討して訂正した文字とを見比べてみたが、ほぼ訂正した通りであった。

現在、中国各地では、石刻の収集・保存が各地の博物館等によって進められ、一定の成果が上がっていると聞く。例えば、本稿に続く渡邊氏の報告にあるように、我々は、前述の森田科研により、2005年、山西省臨汾市の東郊、浮山県・東張郷・貫里村にある天聖宮所蔵の石刻の調査に赴いたことがあった。この時には、多くの石刻が、天聖宮遺址内の草むらや祠の基壇上に横倒しになっていたり、近くの民家に無造作に置かれていたり、保存の状況は決して良くなかった。しかし、今回の科研で、「忽失歹碑」調査の翌日、4年ぶりに天聖宮を訪れてみると、それらの石刻は、天聖宮近くの貫里村老年小学センターという施設内に碑廊がつくられ、そこにきれいに並べられていた。大きな進歩である。

しかし、このように保全されている石刻はほんの一部に過ぎず、「忽失歹碑」のように、保護するための何の措置も講じられていない貴重な石刻は数多いという。船田氏も、摩耗・損壊も目を追って進行していくことを懸念し、近年の刊行物で報告されている石刻を実見・検分する調査と平行して、その確認作業を進めること、史料整理と現地研究者との情報交換を進めて行くことを喚起している[船田前掲論文、17-18頁]が、まさしくその通りであろう。「忽失歹碑」の現状を目の当たりにし、私自身もその必要性を痛切に感じた。

(むらおか ひとし 龍谷大学)